

‘Dark Tourism’ in a Muslim Society: Multiple Interpretations and Comments on Tsunami Tourism in Aceh, Indonesia

SAITO, Chie[†], CUT Dewi[‡]

Abstract

This paper argues that dark tourism in a Muslim society provides a variety of interpretations of deaths, disasters, and tourist sites through an analysis of exhibitions and interviews with guides and visitors in a tsunami museum in Aceh, Indonesia, the most popular attraction of tsunami tourism after the 2004 Indian Ocean Tsunami devastated Aceh. Dark tourism is a controversial concept that does not have any shared definition and which some people, including scholars, do not like to use because of the word “dark.” But what does “dark” mean? Is dark tourism really “dark”? In this paper, I show how death and the tsunami disaster are interpreted in Islamic contexts; and how visitors to the tsunami museum interpret and comment on tsunami tourism in and outside religious contexts.

Keywords

dark tourism, disaster, Islam, Indonesia

ムスリム社会におけるダークツーリズム —アチェ津波観光における解釈の多様性—

齋藤 千恵[†], チュット デウイ[‡]

キーワード

ダークツーリズム, 災害, イスラム教, インドネシア

1. はじめに

ダークツーリズムという言葉やそう冠する観光地に遭遇する機会が、21世紀に入っ

てから多くなった。ダークツーリズムの定義は、前世紀末にLennonとFoleyにより提示され、それ以来様々な研究者が様々な定義

[†] csaito@seiryu-u.ac.jp (Faculty of Humanities, Kanazawa Seiryō University)

[‡] Syiah Kuala University

のもと、ダークツーリズムについて論じてきた。LennonとFoley(2010)は、ダークツーリズムを残酷性、災害、死に纏わる観光とし、ユダヤ・キリスト教の影響がその価値観に色濃く及ぶ西洋社会とそれと同様の価値観を持つ観光地に限定した議論であるとしつつ、ポスト・モダニズムの議論の流れの中で、近代性への不安を生み出すことを条件に定義している。一方で、Sharpley (2009: 5-7)は、ダークツーリズム概念は多様化しており、そのため曖昧で不明確なものとなっていると述べる。また、BowmanとPezzullo (2010)は、「ダーク」という言葉に関して議論を展開し、何がダークなのかということについて論じ、ダークツーリズムと特定される観光においても、その対象の捉え方は多様であることを示している。

同様に、本論は、ダークツーリズムと呼ばれる観光における対象の捉え方の多様性を論じる。特に、2004年インド洋津波被災地であるインドネシアのアチェ州で展開されている津波観光の主要スポットであるアチェ津波博物館でのインタビュー調査に基づき、住民の大半がムスリムであり、ムスリム観光客が多い観光地⁽¹⁾におけるダークツーリズムの捉え方について、博物館の展示、ガイドや観光者の解釈に関して考察する。

ダークツーリズムと呼ばれる観光は、LennonとFoleyの著作以来、徐々に知られるようになった。インドネシアにおいても、マスメディアにより近年広く知られつつある。例えば、2019年に、インドネシアで最も有名な新聞の一つであるKompas (Kompas.com 2019)に、ダークツーリズムについての記事が出された。この記事は、二つの出来事を受けて書かれていた。一つは、2018年に津波被災したバンテン州の被災地で、復旧・復興作業や破壊された被災地を背景に、「不適切にも」携帯電話で自身を撮影している観光者についての報道で

ある。⁽²⁾もう一つは、米国のケーブルテレビ局HBOにより放送されたチェルノブイリのダークツーリズムを扱った番組である。Kompasの記事の中では、ダークツーリズムを災害を題材にした観光とし、アイルランドの専門家の「中には恐怖を楽しもうと言う観光者もいる」という言葉を紹介している。また、ワシントンD.C.に本部を置くCenter for Responsible Travelの所員の言葉を引用し、ダークツーリズムの観光地ではその地域に敬意を払うことの必要性を強調する。

この記事では、アイルランドや米国の専門家たちの話を掲載しているものの、問題となった行動を取ったのは、インドネシア人観光者たちである。記事の写真に、頭を覆った女性もいることから、ムスリムの観光者たちも含まれることが分かる(cf. The Guardian 2018)。こうした記事のもととなった行為は、ダークツーリズムあるいは災害をテーマにした観光やその対象に対する解釈が多様であることを示している。

2. 災害、観光アトラクション、ダークツーリズム

2004年12月26日に起きたスマトラ沖を震源にするマグニチュード9.1の地震とそれに続く津波は、史上最大の自然災害の一つと言われ、インド洋沿岸の国や地域に大きな被害をもたらした。中でも、震源地近くに位置するスマトラ島の北端にあるアチェ州とニアス島の沿岸部は壊滅的な打撃を受けた。アチェ州における人的損害は大きく、死者128,515人、行方不明者37,063人、国内避難民は、513,278名であった(OCHA 2005)。

この災害は、しばしば、アチェの歴史の中に位置付けられて語られる。この自然災害がもたらした大規模な物的、人的損失・損害は、多方面でアチェ社会に大きな影響を及ぼしたのである。1970年代に始まり20世紀末に激化していたインドネシア軍とGAM (Gerakan Aceh

Merdeka/自由アチェ運動)の間の紛争終結にも繋がった。津波被災後には、インドネシア内外から様々な団体や国際援助機関、国家が援助や復旧・復興のためにアチェを訪れた。そのため、アチェ社会の孤立が解消された。

復興過程において、津波観光が始まり、アチェ津波博物館が建設され、巨大発電船アプン号や家の上に乗り上げた漁船といった津波により内陸部に運ばれた船が観光名所となった。アプン号を取り囲むように津波教育公園も作られた。加えて、津波被災に関連するモニュメントが建設されていった。

注目すべきは、州都バンダ・アチェ市の中心にあるブラン・パダン広場やアチェ津波博物館には、援助に訪れた国の国旗とともに、その国の言葉で、「平和」と書かれたプレートが設置されたことである。復興は、地震・津波からの復興のみならず、紛争終結後の復興も意味しているのである。こうした社会的な変化をもたらしたことから、後述するように、アチェ社会において津波災害が、常に否定的に評価されているわけではなかった。

被災後4年程の復興過程において、津波観光では、被災体験の継承や経済発展という目的が示されてきた。この期間において、アチェの津波観光をダークツーリズムと呼ぶことは、ほとんどなかった。復興局がアチェから去り、復興成功宣言が国連から出されてからしばらく経っても、ダークツーリズムという言葉は、アチェ観光では使用されていない。しかし、その後、アチェ州文化・観光局の職員であり、元アチェ津波博物館館長のラマダニが、ダークツーリズムとしてアチェの津波観光を呼ぶようになった。

例えば、「…より穏やかに、そして、情緒的に、過去の困難な状況の多くを記述するため、『ダークツーリズム』の一部として『メモリーツーリズム』あるいは『アチェメモリーツーリズム』という新しい言葉も使用され、[アチェの津波観光に]適用されている」(Rahmadhani

2015: 1, 筆者訳)と述べる。ラマダニは、ダークツーリズム自体を定義していないが、彼の上記の言葉から読み取ることができるのは、彼にとってダークツーリズムは、過去において経験された「困難な状況」に関する観光である。そして、アチェ州の場合、この困難な状況は大規模自然災害により引き起こされている。ダークツーリズムという言葉の代わりにメモリーツーリズムという言葉を使用するのは、メモリーツーリズムという用語の方が、「より穏やか」で「情緒的」であるからで、ここから、ラマダニがダークツーリズムという言葉が、人々の感情にネガティブに訴える概念であると考えているのが分かる。

いくつかのウェブサイトでも、アチェの津波観光をダークツーリズムとして紹介している。人々が容易にアクセスできるウェブサイトにおいて、アチェの津波観光は、ダークツーリズムとしてどのように意味づけられているのか。アチェ観光を扱ったインドネシア語のウェブサイトで、Googleにおいてdark, tourism, Acehという3語で検索して現れた上位5サイトを見よう。

Googleでの検索で上位一位として現れたウェブサイト、Suara.comでは、ダークツーリズムは、自然災害、戦争、その他、以前悲劇が起こった場所への観光と定義しており、観光者は、ダークツーリズムを通して災害を記憶にとどめるとしている。このウェブサイトで取り上げられているアチェ州の観光スポットは、津波教育公園にあるアプン号である。アプン号は、巨大な発電船で、これを内陸部まで5キロ、津波が運んだことにより、津波災害の大きさが推し量られると述べている(Priatmojo and Saraswati 2019)。

検索で、2番目に上がったウェブサイトでは、ダークツーリズムを死をテーマにした観光と定義している。ここでは、ダークツーリズム観光地を羅列し、チェルノブイリやホロコース

ト博物館と共に、アチェ津波博物館の名を挙げている (Khalishah 2019)。更に、detik Travel という検索結果第三番目のウェブサイトでは Lennon と Foley のダークツーリズム論を取り上げ、ダークツーリズムを、「虐殺、殺人、抑留、民族浄化、戦争、災害を含む人類の歴史におけるダークな悲劇の現場を訪れる」観光であるとしている。インドネシアのダークツーリズムの観光地として、植民地支配に関連する場所やムラピ火山の噴火によって壊滅した村、アチェ津波博物館を挙げている (Intan 2019)。

検索結果 4 番目のウェブサイト Triyono (2015) も同様に、Lennon と Foley のダークツーリズム論を引用し、ダークツーリズムを自然災害や虐殺があった場所、戦場を訪れる観光と定義し、そうした観光地は、ニュース性から観光地となったとする。このサイトでは、インドネシアのダークツーリズムサイトとして、アチェとムラピを挙げている。アチェに関しては、地震と津波の被災に心を動かされ、被災者に同情する観光者の在り方を述べている。

5 番目のウェブサイトで (Hutricikaberutu n.d.) も、製作者は、Lennon と Foley のダークツーリズムの定義を引用し、それを、「悲劇、残虐性、あるいは死」に関連する場所を訪れる観光形態と述べる。このウェブサイトでは、他のサイトとは異なり、「多くの人々が信じるのは、津波の際、[現在発電船がある場所にあった] 家の所有者たちは、逃げる時間がなく、家と共に船の下にうめられている」という説明を付け加え、何体もの遺体の上にある観光地をほのめかす。

これらのウェブサイトで共通しているのは、ダークツーリズムの観光地で、非日常的な状況のもと、過去に多くの人的損失が生まれていることである。5 番目のウェブサイトは、観光地が遺体の上にあるということをつけ加えることにより、他のウェブサイトにはない意味合いを作り出そうとしている。しかし、これらウェブ

サイトやラマダニによるダークツーリズムという表現からは、例えば幸せと悲痛というような衝突しあう意味の共存は見いだせない。

3. 津波博物館の展示とそこに見られるストーリー

津波観光は、エネルギー鉱物資源省地質庁下にあるバンドゥンの地質学博物館とアチェ政府により創られてきた。民間の団体よりも、政府機関の役割が大きい観光である。中央との結びつきが強いものの、アチェ津波博物館のみ、2019年以降は地質学博物館の監督下からはずれ、アチェ州文化・観光局に組み入れられている。その中で津波博物館の展示も変化している。

復興と経済発展が進み、被災者やその周囲の人々の被災地外への移住や被災地への非被災者の移住、何よりも14年という年月が、多くの死者・行方不明者を出した災害に関する記憶を薄れさせていった。被災後生まれた子供たちは、既に中学生になっている。アチェ津波博物館館長ハフニダールは、こうした子供たちに対する教育を重視する。新たな体制下の博物館で、彼女が目指したのは、子供たちが受け入れやすいビジュアル・イメージに力点を置いた展示である。2019年後半のアチェ津波博物館は、その展示の大きな変換期にあり、展示入れ替えの過程にあった。

津波観光では、成立当初より歴史的視点で災害が語られていた。歴史的視点で表現される津波は、津波前の歴史を必要とする。2019年の津波博物館でも、こうした視点からの展示があった。⁽³⁾ 2階の二つの展示室では、被災前のアチェの歴史と文化がいくつかのパネルで示されている。最初のパネルには、アチェ王国時代のクタラジャ (現在のバンダ・アチェ) の地図が示されており、沿岸部に建物が建てられていないことが見て取れる。そのことを示してか、写真の説明には、当時のアチェ王国が防災に配慮された都市であったことが述べられている。

また、オランダ植民地政府の支配に抵抗したアチェ人のヒーローとヒロインの肖像も展示されている。こうした展示は、災害について展示する博物館という理解で訪れた外国人のある者に戸惑い覚えさせる。一方、アチェの人々は、津波被災がアチェと密接に結びついていると考える、端的に言えば、被災地はアチェであることから、何故こうした展示に他者が違和感を持つのか、しばしば、不思議に思うのである。

更に、被災時の様子を上映するシアターの隣に設けられた展示室では、津波災害を、アチェという地域と密接に結びつけ展示している。シムル島の津波伝承と切り紙細工を伴った被災前から被災後、復興過程とその後に至る展示である。シムル島に津波の伝承があったことは、壁面に大きく飾られた3枚の絵と展示室に流れる歌により表現されている。⁴⁾

更に、同じ室内には、シャークアラ大学建築学部が作成した切り紙細工と説明パネルにより津波災害がアチェ社会に何をもたらしたかを示している。被災から間もない間は、津波という言葉はアチェ語にはないと言われてきた。ところが、復興過程が終わる頃、被災者の間でアチェ語の津波を表す言葉が言われ始めた。更に、シムル島の津波に関する伝承や津波を表すスモンという言葉が注目され、新たに津波博物館の展示に加わった。それとともに、古い文献にあるアチェ語の*le Beuana*という津波を意味する言葉も、「隠された知識」として古い時代にあった防災のための工夫の展示に加えられた。

しかしながら、シムル島を除くと、アチェ州では、津波に関するローカル・ナレッジは忘れ去られていた。展示では、その理由として、1970年代から続く紛争を挙げている。

津波は、コンフリクトが続く中で起こり、コンフリクトを終結させるきっかけとなった。展示では、「二つのコンフリクト」として、インドネシア軍とGAMの間の紛争と津波を挙げ、

被災後は、「平和」が「共通した出発点」であったことを示している。こうして平和を以てスタートした被災後のアチェ社会には、様々な国が援助や復興のために訪れたことが示されている。被災したアチェを援助した国々は、53か国に上り、その国々の名前が、切り紙の展示で示されている。この展示は、いくつもの差し出された両手が描かれている「Hope」という標題のパネルで終わる。ここでは、津波被災経験は、今後同様の災害を生み出さないための「人類の遺産」であるとし、そうした学びを提供するアチェ社会の役割を、国際社会とのつながりにおいて位置付けている。

一方、短期間で解体されてしまったが、感情的に訴える展示も2019年の初めには見られた。子供と母親の結びつきが題材とされ、母親が被災直前まで使用していた場所として、災害により破壊された台所が展示室に再現されていた。母親に関連する展示は、母を失った子供、子供を失った親の手記や思い出の物も展示され、最後が「Hope」と題されハッピーエンドで締めくくられる切り紙の展示とは異なり、災害によりもたらされた悲しさと苦しさとといった側面を打ち出すのに終始していた。

4. ガイドたち

バンダ・アチェ市やその周辺の観光地を案内するガイドには、地元政府所属のガイドや民間の観光ガイドがいる。ガイドたちには、被災者や被災により肉親を失った者たちが含まれる。アチェ津波博物館のガイドを除くガイドたちは、アチェ州の観光スポットを案内し、バンダ・アチェ市内であれば、津波博物館や津波教育公園といった津波観光スポットに観光者たちを案内する。こうしたガイドたちの津波の捉え方は多様である。

例えば、バンダ・アチェ市の観光ガイド協会に所属するババA(仮名)は、津波観光に関わって、これが「ダークツーリズム」であると

思ったのは、一度だけだったと言う。その一度は、マレーシアからの観光客を案内する打ち合わせのためカンブンJ(仮名)を訪れ、話をしてもらうことになっているイمام(ムスリム・コミュニティにおける宗教的リーダー)に会ったときのことであった。被災を語るイمامは、話しながら涙を流していたと言う。今まで被災地での観光に携わり、こうした場面に出くわしたことはなかったため、「自分が、この観光をダークツーリズムと感じたのは、この時だけだった。罪悪感を感じた」と述べる。ここで、ババAが言うダークツーリズムは、災害などに由来する喪失経験を含む観光のことである。辛い体験をイمامに思い出させてしまったため、「罪悪感を感じた」のである。

一方、津波により弟を失った、ガイド協会のリーダーを務めるババFは、津波は神からの祝福であると述べる。(津波が祝福であるという表現は、バンダ・アチェ市観光・文化局発行の津波観光パンフレットにも見られる表現である。このパンフレットでは、紛争中は、外出先で思うように祈ることもできなかったことを挙げ、この紛争を終結に導いた津波を「姿を変えた祝福」とする[Department Tourism and Culture-City of Banda Aceh n.d.: 1]。)ババFは、GAMとインドネシア軍の紛争当時のことに関して、彼が経験したことを語った。それは、他のアチェ州住民が経験したのと同様の、身体的な危険であったり、一般のインドネシア人とは異なる扱いであった。紛争当時、アチェ州住民は、赤と白に色付けされた大判の身分証明書を携帯していなければならなかった。他のインドネシア人が持つ携帯サイズの身分証明書より、かなり大きいこの証明書は、携帯に不向きであったが、身分証不携帯であるのが発覚した場合、身体的な罰が加えられることがあったという。また、機銃掃射に見舞われたこともあったと述べる。こうした身体的な危険をもたらした紛争が、津波によって終結したことによ

り、ババFは、津波を祝福と表現したのである。

一方、バンダ・アチェ市観光局に所属するガイドであるババBは、イスラム教の教えの中で、合理的に災害による死を捉えようとする。彼は、災害で死亡したときは、まだ死後の行き先は決まっておらず、それは最後の審判の際に決まるのであると述べる。(被災地では、災害によって親族が亡くなった場合、彼らは神の隣にいらると言われていた。また、被災後14年を経て、災害や戦争によって亡くなった人は、楽園への直通切符を得ると言われていた。)そして、天国に行くためには、人間は、一度は死なねばならないと述べる。彼によれば、ムスリムは、これを知っているから、人が亡くなってしばらくの間は悲しいが、その後は、死を受け入れ理解するという。このババBの解釈は、アチェのイスラム教の教えに忠実に沿ったものである。

ここでは、紙面の関係上3人のガイドたちが語る津波災害しか扱わないが、彼ら3人の解釈には、それぞれイスラム教の教えが反映している。しかし、彼らが置かれた社会的状況や対人関係によって、あるいは、これまでの経験から、災害の解釈や感じ方はそれぞれ異なる。同様に、以下に示すように、津波博物館を訪れる人々の津波災害やその展示の解釈も多様なのである。

5. 来館者たちの解釈

2019年8月・9月に津波博物館と津波教育公園を訪れた人々に対して行った半構造化インタビューでは、宗教的な見解に基づいた災害の解釈が少なくなかった一方で、観光施設や展示、災害に関する多様な感想及び解釈があった。津波教育公園で行った130名を対象とした調査では、全体の33%がイスラム教的な枠組みで、津波を解釈していた(齋藤 2019)。他方、本論で扱う津波博物館を訪れた人々を対象にした調査では、112名(外国人25名を含

み, その内マレーシア人は17名)中, 23.8%が災害をイスラム教の教えの文脈の中で解釈していた。

イスラム教的な文脈の中での解釈では, 人々は, 津波の威力をアッラーの業としての解釈している。大自然の力をアッラーの偉大さに結びつけるのである。更に, イスラム教の教えとして, *musibah*という言葉と共に*hikmah*という言葉を使用し, *musibah*の中には*hikmah*があると解釈する。*musibah*は, 日本語で悲劇を意味し, *hikmah*は良いことという意味である。つまり, 津波災害という悪いことと思われることの中にも, 良い面があるという意味である。観光者の中には, *hikmah*をアチェの経済発展という者もいる。津波被災がなければ, アチェはこれほど発展していなかっただろうと述べる者もいた。また, 津波は, 神による警告であり, こうした警告により, 神がアチェをよりよい社会に導こうとしたと述べるビジターも複数いた。(津波がアッラーからの警告であったという解釈は, 被災地でよく聞かれた解釈であった。生き残った個々の被災者たちは, しばしば自身の被災前の行動を振り返り, 自分が津波被災をし, その上で生き残った原因をイスラム法から逸脱した行動であったと推測した。)

そのほか, イスラム教の枠組みでの解釈やコメントは, 遺物として展示してあったアル・クルアーンは神を思い出させる, 将来同じような災害が起こらないように神に祈る, 博物館の展示は神に助けを求めることができることを思い出させるといったものや, 人は間違いを犯す存在なので自省 (*muhasabah*) せねばならないと, ムスリムがしばしば行うことを勧められる行為の必要性を述べるものであった。

更に, 津波を歴史 (*sejarah*) の一部と解釈する観光者たちも多い。しかし, インフォーマントとなった多くの観光者たちは, 単に, 「歴史を知ることができた」というだけで, そこに宗教的な解釈を差し挟んではいなかった。

その他, 来館者のコメントの中で多かったのは, 「悲しい」という言葉一言のみで被災を語るものである。また, 展示により津波について知ることができたと言う人々も複数いた。展示がよいとだけいう人もいれば, 切り紙細工の展示の素晴らしさを称賛する人々もいた。防災について知ることができたというものや, 自然災害に備えなければならないというコメントもあった。また, 館内にあるトイレやエアコンの効き, 来館者が連れている小さな子供たちのマナーについて苦情を述べる人々もいた。

こうしてイスラム教的な文脈での津波の解釈もあれば, 宗教的な意味が見られない解釈やコメントもあり, 来館者たちの津波博物館やその展示の捉え方はさまざまであった。

6. 結語

ダークツーリズムという言葉は, この20年の間に聞かれるようになった言葉で, まだまだその言葉を知らない人々が社会の多数派であると考えられる。また, どの観光地で行われている観光をダークツーリズムと呼ぶのかということも, その観光に関わる人々の間でさえ共通認識がないこともある。従って, 特定の観光地の特定の観光をダークツーリズムと呼ぶ人もいれば, 呼ばない人もいるし, 呼ばない人々の中には, ダークツーリズムという名称に否定的な人々もいる。

大規模災害で壊滅的打撃を被り, 多くの死者・行方不明者を出した被災地では, ダークツーリズムという呼び名が, 復興過程にあり再建されつつある被災地にそぐわないと考える人々もいる (大森 2012)。特定の地域の特定の観光をダークツーリズムと呼ぶか否かの判断には, 研究者を含む人々の経験や社会関係, そうしたものから由来する感情や思考, 関心が根底にあるだろう。

こうした場合, ツーリズムの前に付くダークという言葉が何を意味するのか, 何を指すのか

ということが問題となってくる。ダークである
と、特定の事象や場所を意味づけてしまうこと
で、それがそこに関わる人々の感情を傷つけた
り、大規模災害により大きなダメージを受けて
いる社会やコミュニティに追い打ちをかけてし
まうという心配が、その言葉に付きまとう。

その一方で、本論で示してきたように、
「ダークツーリズム」の観光地にある特定の事
象が、誰にとっても、いつでも「ダーク」なの
かという点、そうではない。アチェで行われて
いる津波観光をダークツーリズムと見なすウェブ
サイトでは、「ダーク」であることの究極の
源は、死あるいは、大量死を起こした災害と
なる。これらのウェブサイトでは、Lennonと
Foleyによる定義の一部を用い、ダークツー
リズムを定義している。しかし、一方で、そこ
には、LennonとFoleyのダークツーリズム論で重
要となる近代性に関する議論は見られない。そ
のため、死がダークツーリズムの共通の源に
なってしまうのである。しかし、死やそれをも
たらした災害の意味付けは、一元的なものでは
ないだろう。

津波博物館の展示が示すストーリーは、紛争
の中にあったアチェ社会に、津波がもたらした
歴史的な変化を描いていた。ガイドの中にも同
様の解釈をする人がいた。

一方、インタビュー調査において、悲しいと
いう言葉で博物館展示のコメントを表す人々は
多かった。友人や肉親との別れを意味する死
は、喪失感、悲哀や哀惜の念といった感情を強
く感じる時である。しかし、イスラム教の教え
の中で、死は通過点であり、そこを通過して死者
が楽園に行くとするならば、災害がもたらすこ
とは「ダーク」であることばかりではないと解
釈できる。アチェの観光地で観光者や地元の人
々がよく言う、悲劇 (*musibah*) の中にある
良いこと (*hikmah*) という考え方も同様である。

イスラム教の教えの枠組みの中では、津波に
アッラーが介在していることから発する解釈が
いくつもあり、神が介在することから、一概に
災害自体が「ダーク」であるとは言えなくなっ
ている。加えて、ダークかその反対かという意
味付けのみならず、観光者たちは、展示などの
観光対象を様々に捉えていた。ダークツーリ
ズムと名付けられた観光においても、暗さをもた
らすような感情や覗き見趣味が際立つばかりで
はなく、多様な解釈や意味付け、情緒的な反応
があるのである。

【付記】

本稿は、科学研究費基盤 (A) 一般 (課題番号
18H03595) による研究成果の一部である。

注

- (1) アチェの津波波観光地を訪れる人の数を、最も来訪者の多いアチェ津波博物館のそれとするならば、2018年はインドネシア人655,882名、外国人33,254名であった (アチェ津波博物館提供情報)。また、2018年の外国人観光客33,276名の72.76%は、マレーシア人である (Badan Pusat Statistik Provinsi Aceh n.d.: 22, 23) ため、同じことが津波博物館の外国人来館者にも当てはまる。マレー語を母語とするマレーシア人あるいはマレー人は、インドネシア語を理解し、その多くは、イスラム教徒であると見なされている。
- (2) この記事は、イギリスのガーディアン紙 (The Guardian 2018) による報道に端を発した報道である。しかし、インドネシアで、携帯電話で自身や同行者を撮影する姿を見るのは、それほど珍しいことではない。
- (3) アチェ津波博物館の展示室は、2階と3階にある。しかし、2019年は8月下旬よりしばらくの間、3階の展示室は、展示替えのため閉鎖されていた。これは、筆者の調査期間とも重なる期間であった。その後同年中に、避難生活を再現した展示が3階展示室に見られるようになった。
- (4) シムル島は、アチェ州の一部で、2004年インド洋津波を引き起こした地震の震源地の近くに位置する島である。ここでは、過去の出来事の数々を詠唱することで伝えてきた。

参考文献

- Badan Pusat Statistik Provinsi Aceh
n.d. Statistik Kunjungan Wisatawan Mancanegara Provinsi Aceh (アチェ州訪問国際観光客統計).
<https://aceh.bps.go.id/publication/download.html?nrbyfeve=MDdmN2E4ZjdmZDhjMTdmZTElOTlkYmM4&xzmn=aHR0cHM6Ly9hY2VoLmJwcy5nby5pZC9wdWJsaWNhdGlvi8yMDIwLzAxLzAyLzA3ZjdhOGY3ZmQ4YzE3ZmUxNTk5ZGJjOC9zdGF0aXN0aWsta3VuanVuZ2FuLXdpc2F0YXdhbilitYW5jYW5lZ2FyYS1wcm92aW5zaS1hY2VoLS0yMDE4Lmh0bWw%3D&twoadfnorfeauf=MjAyMC0wMy0xNyAxMDowMD0Mg%3D%3D>, accessed on March 15, 2020.
- Badan Pusat Statistik Provinsi Aceh.
Bowman, Michael and Phaedra Pezzullo
2010 What's so 'Dark' about 'Dark Tourism'? *Tourist Studies* 9 (3) : 187-202.
- Department of Tourism and Culture-City of Banda Aceh n.d. Wisata Tsunami Track (津波観光) . Visit Banda Aceh 2011. Banda Aceh : Department of Tourism and Culture.
- Guardian, The
2018 'Destruction gets more likes': Indonesia's tsunami selfies-seekers. *The Guardian* December 26, 2018.
<https://www.theguardian.com/world/2018/dec/26/destruction-gets-more-likes-indonesias-tsunami-selfie-seekers>, accessed on December 30, 2019.
- Intan, Putu
2019 Dark Tourism, 'Wisata Kelam' yang Kian Populer (ダークツーリズム, ますます人気が出ている'ダークツーリズム') . *detik Travel* November 21, 2019.
<https://travel.detik.com/travel-news/d-4792669/dark-tourism-wisata-kelam-yang-kian-populer>, accessed on December 6, 2019.
- Hutricikaberutu
n.d. Salah, Dark Tourism Bukan Wisata Seram kok, Indonesia Ternyata Punya Banyak Objek Wisatanya Lho (ダークツーリズムが怖い観光というのは間違い, インドネシアに多くの観光サイトがあることが判明) . *hipwee*.
<https://www.hipwee.com/travel/salah-dark-tourism-bukan-wisata-seram-kok-indonesia-ternyata-punya-banyak-objek-wisatanya-lho/>, accessed on October 14, 2019.
- Khalishah, Nadia
2019 Dark Tourism, Konsep Wisata Untuk Mengenang Sejarah Kelam (ダークツーリズム, 暗い歴史の記憶のための観光コンセプト) . *Holamingo*. <https://holamingo.id/dark-tourism-wisata-sejarah-kelam/>, accessed on December 6, 2019.
- Kompas.com
2019 Dark Tourism, Saat Tempat Bencana Jadi Tren Wisata (ダークツーリズム, 被災地がトレンド観光地となる時) . *Kompas.com* June 28, 2019. <https://travel.kompas.com/read/2019/06/28/150900727/dark-tourism-saat-tempat-bencana-jadi-tren-wisata?page=all>, accessed on October 20, 2019.
- Lennon, John and Malcolm Foley
2010 *Dark Tourism*. Hampshire: Cengage Learning.
- OCHA
n.d. Indonesia, Sri Lanka, Thailand: Earthquake and Tsunami OCHA Situation Report No.34. <http://www.reliefweb.int/node/169972>, accessed on May 5, 2013.
- Rahmadhani, M.Bus
2015 Positive Long Term Impacts of Aceh's Past Disaster in Creating Potential Tourism Destination: Another Approach towards Future Community's Disaster Resilience. *東北紀行* 1 (2015年5月) : 1-2.
- 大森信治郎
2012 『復興ツーリズム』 或いは『祈る旅』の提言—『ダークツーリズム』という用語の使用の妥当性をめぐって『観光研究』24 (1) : 28-31.
- Priatmojo, Galih and Amertiya Saraswati
2019 Mengenang Bencana di 4 Destinasi Dark Tourism di Indonesia (インドネシアの4つのダークツーリズムサイトにおける災害の記憶の共有) . *Suara.com*. <https://www.suara.com/lifestyle/2019/11/18/180527/mengenang-bencana-di-4-destinasi-dark-tourism-di-indonesia>, accessed on December 6, 2019.
- 齋藤 千恵
2019 「津波観光と観光者にとっての津波」『第34回日本観光研究学会学術論文集』Pp.441-444。日本観光研究学会。
- Sharpley, Richard
2009 Shedding Light on Dark Tourism: an Introduction. *In* R. Sharpley and P. Stone eds., *The Darker Side of Travel*. Pp.3-22. Toronto: Channel View Publications.
- Triyono, Heru
2015 5 Destinasi Wisata Kelam (5つのダークツーリズムサイト) . <https://travel.detik.com/travel-news/d-4792669/dark-tourism-wisata-kelam-yang-kian-populer>, accessed on October 14, 2019.

